

## ローマ人への手紙第七〇回質問

7..5 私たちが肉にあったときは、律法によって目覚めた罪の欲情が私たちのからだの中に働いて、死のために実を結びました。

7..6 しかし今は、私たちは自分を縛っていた律法に死んだので、律法から解かれました。その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

(ロマ七章五―六節／新改訳2017)

(1) 五節にある「肉」とはどういう意味ですか。

(2) 六節にある「古い文字にはよらず」と「新しい御霊によって」の違いを説明して下さい。





## クリスチャン生活のすばらしさ

(ロマ七章五―六節)

クリスチャンというのは、だれでも、かつてはどのような者が「しかし今は」どうなっているかということが言える者たちで、この変化を持っていないクリスチャンというものはありません。このクリスチャンの変化については、聖書の至るところで教えていますが、ここでも、この変化について教えています。

ここには、いくつかの聖書独特の用語が出て来ますから、まずそれから見えていくことにしましょう。まずわたしたちが「肉にあった時」と言っていますが、この「肉」ということばについて考えてみましょう。同じ「肉」と訳されていますが、食べる肉のことは、原語では別のことばが使われていますから、ここでは取り上げません。ここで使われている原語は、

「サルクス」<sup>(2)</sup>ですから、「サルクス」という原語が使われている場合について考えてみますと、第一に、「人間一般」を指している使い方がなされています。たとえば、使徒たちの働き二章一七節で、「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ごう」と言われている場合の「人」がそれに当たります。またそれとの関連で、人間の弱さ、はかなさの面にスポットが当てられる時にも、このことばが使われています。たとえば、ペテロの第一の手紙一章二四節で、「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る」と言われている場合の「人」がそれです。しかし、この「サルクス」ということばは、これだけではなく、第二に、「からだ」を意味する場合にも使われています。たとえば、ガラテヤの諸教会への手紙二章二〇節で「わたしはキリストとともに十字架につけられてしまった。もはやわたしが生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられるのである。今、わたしが肉体において生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって生きているのである」と言われている場合の「肉体」がそれです。

ところが、ここで使われているのは、このいずれでもありません。ここで使われている場合は、こういう自然のままの「サルクス」なのではなく、倫理的な意味を持っています。ローマ教会への手紙八章を見ると、そのことがわかります。

「肉の思<sup>(3)</sup>いは死であるが、御霊の思いはいのちと平安とだからである。」

このことばを正しく理解するためには、主がニコデモに語られた次のことばを見るとよくわかります。

「肉によつて生まれた者は肉です。御霊によつて生まれた者は<sup>(4)</sup>霊です。」

ここで使われている「肉」ということばは、いずれも原語では「サルクス」ですが、これでは意味がよくわからないので、「現代訳聖書」では、これを次のように訳しております。

「肉体的誕生しかしていない人は、生まれながらの人にすぎません。御霊による超自然的な霊的誕生を経験した人だけが、生まれ変わった人なのです。」

同じ「サルクス」ということばが一つの文章で二度使われていますが、最初の場合は「肉体」を指しているのに対して、次の場合はそうではありません。そしてこの主の語られたおことばに、わたしたちが今知ろうとしている「肉」についての第三の意味の解説を見るのです。つまり、聖書が教えているもう一つの使用法は、「肉」を、生まれながらのものの意味に使っており、それに対して「霊」を生まれ変わったものの意味に使っていることです。

わたしたちが今取り上げている箇所は、まさしくこの第三の意味で「肉」ということばを使っています。<sup>(5)</sup>ですから、「わたしたちが肉にあった時」とは、「わたしたちがまだ生まれ変わっていない時」であり、クリスチャンになる以前のことを指しています。

次に、「罪の欲情」ということばについて考えてみましょう。「欲情<sup>(6)</sup>」ということばは、もともとは決して「罪の欲情」



というように「罪」と対たいになつていたものではありません。人類が罪に陥るまでは、それは神によつて与えられたものとして、すべて靈的なものでした。ですから、欲情そのものが悪であると言つて禁止する人々の誤りについて、パウロは次のように警告を發しています。

「御靈が明らかに言われるように、終わりの時代になると、ある人々は、惑わす靈と悪靈の教えに心を奪われ、信仰から離れるようになる。これは、うそつきどもの偽善によるものである。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、ある食物を断つことを命じたりする。しかし、食物は、信者にとつて、また真理をさらに深く知っている人が、感謝して受けるようにと、神が造られたものである。神が造られたものはみな、良いものであつて、感謝して受けければ、捨てるものは何一つない。」

食欲も性欲も睡眠欲も生命保存欲も、本来、神がわたしたちのために造り、それを与えてくださったという意味で、決して悪いものではありません。

人類が罪に陥つたことによつて、それらのものが本来神によつて造られた時の目的から逸脱して使われるようになりました。欲情の乱用です。それが罪の支配下に置かれた欲情、つまり「罪の欲情」なのです。罪の支配下ということとは、悪魔の支配下ということであり、次のように教えられているとおりです。

「そのころは、それらの罪の中にあつて、この世のやり方に従い、空中の權威を持つ支配者として、今も不従順な者

たちの中に働いている靈に従って歩いていた。<sup>(8)</sup>」  
悪魔は実に巧妙なやり方で、生まれながらの人間の欲情を用い、わたしたちのからだのあらゆる部分に働きます。目を通して見るべきでないものを見させ、想像力をたくましくして、いろいろなことを想像させ、欲望を満足させるために、あらゆる手段を使います。

「律法によ」って働くとは、律法によって、それが罪であることがわかるといっただけでなく、律法によって、それが罪であることがわかればわかるほど、罪を犯すようになるのです。ですから、律法の教えは、人間が全く罪を持っていなかった時には安全であったのですが、罪人である人間に対しては、それだけではむしろ危険なのです。多くの人々が間違っ  
て考えているのは、この点ではないでしょうか。道徳的なことを教えさえすれば、人間はりっぱになれると考え、そうしています。しかし、聖書の教えはそれと全く違います。道徳によって人間は罪の自覚を持つだけではなく、ますます罪への執着が深まっていくのです。そして、その最後は、死という実を結ぶに至ります。

これがクリスチャンになる以前のわたしたちの姿でした。「しかし今は」違います。「しかし今は、縛られていた律法に対して死んで、それから解き放されたので、文字の古さによってではなく、御霊の新しさによって仕えているのである。」ここに、クリスチャンになる前の姿とクリスチャンになってからの大きなコントラストがあります。

「文字の古さ」と「御霊の新しさ」と言っているのは、律

法に縛られていた古い生活と、御霊によってそこから解き放された新しい生活のコントラストです。この「新しさ」<sup>(9)</sup>は、決定的な新しさであって、時の経過とともに古くなってしまうことのないものです。新約聖書の原語であるギリシヤ語にも、もう一つ別の「新しさ」<sup>(10)</sup>ということばがあるのですが、それは、いわば「若さ」といった意味で、やがて古くなり、年老いていくものです。しかし、わたしたちクリスチャンの新しさは質的に新しいのです。それは、わたしたちが「縛られていた律法に対して死んで」しまったからなのです。この「死んだ」<sup>(11)</sup>と言われていることばも、もう絶対にあと戻りできない決定的な死を意味しています。死んだものももう一度息を吹き返してくるといふようなことのないただ一度限りの死です。

「文字の古さ」と言っているのは、律法のことであって、律法から解き放された以上、わたしたちは全く自由になり、新しい人生が始まりました。それは、御霊によってなされ、御霊によって導かれていくために、「御霊の新しさ」と呼ばれています。この点については、八章でさらにくわしく説明していますので、ある意味では、八章はこの七章六節の注解と言えないこともありません。

この新しさは、御霊による新生であり、パウロがコリント教会への手紙の中で、次のように教えているものにはかなりません。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新

しくなりました。<sup>(12)</sup>」

こうして、わたしたちは「神の御霊によって「礼拝し<sup>(13)</sup>」  
「真の礼拝者<sup>(14)</sup>」として生きることができるようです。わたした  
ちには、神殿というような特別な場所は必要がありません。  
わたしたちの会堂は昔の神殿とは違います。会堂の中でなく  
ても、主を礼拝することができます。わたしたちは動物の犠  
牲をささげて主を礼拝する必要がありません。そのような礼  
拝はすでに終わったのです。「神の御霊によって礼拝し、キ  
リスト・イエスに栄光を帰し、肉を頼みとしないわたしたち<sup>(13)</sup>  
は、」旧約時代とは全く違<sup>(15)</sup>います。祈りにおいても、わたし  
たちは「聖霊<sup>(16)</sup>によって祈り<sup>(15)</sup>」ます。そして、わたしたちは  
「御霊によって歩<sup>(16)</sup>」ます。「これは、もはや肉に従って歩か  
ず、御霊に従って歩くわたしたちに、律法の要求することが、  
完全に満たされるためな<sup>(17)</sup>ので」す。

注(1)コリント教会への第一の手紙一〇章二五節。

(2)「肉」(七・五)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、  
サルクス (σάρξ) ということばが使われています。

(3)ローマ教会への手紙八章六節。

(4)ヨハネによる福音書三章六節 新改訳。

(5)sa:]についてさらに知りたいと思う人は、次の本を参照。L.

Cönen, E.Beyreuther, H.Bietenhard, Theologisches Begriffs-Lexicon  
zum Neuen Testament, 2Bd.

(6)「欲情」(七・五)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、  
パセマ (πάσημα) ということばが使われています。



- (7) テモテへの第一の手紙四章一―四節。
- (8) エペソ教会への手紙二章二節。
- (9) 「新しさ」(七・六)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、カイノテース (καινότης) ということばが使われています。これは、質的な意味での「新しさ」です。
- (10) ギリシャ語で、ネオテース (νεότης) ということばがあります。が、これも「新しさ」ですけれども、これは時間的な意味での「新しさ」です。
- (11) 「死んだ」(七・六)と訳されていることばは、原語のギリシャ語では、アポサノンテス (ἀποθνήσκω) ということばが使われています。これは、不定過去形で、一回限りの出来事を表わしています。
- (12) コリント教会への第二の手紙五章一七節 新改訳。
- (13) ピリピ教会への手紙三章三節。
- (14) ヨハネによる福音書四章二三節 新改訳。
- (15) ユダの手紙二〇節 新改訳。
- (16) ガラテヤの諸教会への手紙五章一六節。
- (17) ローマ教会への手紙八章四節。

